みなとMOTOMACHIケンチクさんぽ vol.9

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部
兵庫地域会　地域まちづくり委員会

酒とおとんと建築と

老舗のＢＡＲでひとり飲んでいると過去と繋がる瞬間がある。みなと元町はそういった場所が数多く点在し、今も意識の中で時間を遡ることができる。仕事終わりにお酒を飲みながら、みなと元町の空気を感じて建築について考える、それが日課となっている。

時にＢＡＲで、時に居酒屋で、時に焼肉店で。入り組んだ路地を散歩するようにお店からお店に移動する。そうしていると自ずとこの界隈で営むお店の連携が見えてくるのである。それは非常に結束が強く、お互いにこの町を支え合っているように感じ、とても心強くもこの界隈から逃れられない魅力のようなものを感じるに至る。そこで出会うお客さんのほとんどは常連さんで、いろんなお話を聞かせてくれたり、付近のお店の話で盛り上がったりする。そういった濃い出会いもこの場所ならではのものであるのだろう。

私が生まれる以前、今の私よりも若年であった父親もこの辺りでお酒を楽しんでいた。その当時に行きつけていた焼鳥店が世代を超えて今も営業している。そのお店に足を踏み入れると、時間を遡って父親がカウンターでお酒を酌み交わしている姿を感じるのである。その時代にこのお店を家族で切り盛りしていた娘さんと話をしたくて通っていたのだと聞いたことがあるからだ。喋る口実を作るために瓶ビールを何本も注文したのだろうか？それともひとり静かに飲んでいたのだろうか？今は自分よりもお歳を召されているその娘さんが気になったりする。

これは、もう５０年ほど昔の話であるが、他にも現在も営業されているお店はたくさんある。とあるＢＡＲで３代目として営業されている方、ある寿司屋では私よりも年上でここで生まれてお店をされている方たちなど、いろんなお話を聞いては、父親が過ごしたこの町の想像を補強するのである。今、若かりし頃の父親と出会ったとしたら、今の私がどのような会話をするのだろうか？今と同じく付近の行きつけのお店の話で盛り上がるのだろうか？意気投合して、何軒もお店を梯子するのだろうか？それとも意見が合わず口論するのだろうか？お酒を愛する父親を疎ましいと思った未成年期もあったのだが、歳を重ね蓋を開けてみると、私も同じくこの場所で楽しんでいる。ただひとつ違うことは建築士としてこの町で過ごしているということである。だから人との会話に散りばめられた情報から過去の情景を鮮明に頭に浮かべることができる。いろんな情報を蓄積し、情景を整えながら、日々飲んでいる。この場所には目に見える以上に素敵な建築が存在している。私にとっては、目を瞑ればいろんな建築が見える。それは人が形作った建築、いろんな人々の目線からの建築である。もちろんそう思えた一番強い感覚はおとんの目線なのである。

さて、今日もこれを書き終えて、みなと元町に建築を見に行こう。

旧チャーリーブラウンにて

人の意識による建築の存在

古くからある建物、モニュメント、そういったものからよりも、人とのつながりや流れから感じることの方が遥かに質の高い情景を生むことができる。その物を写真や本で知るより、あの場所には昔外国人のパブがあったとか、今の南京町広場の場所でドラム缶に火を焚いて暖を取りながらお酒を飲んでいたなどと聞く方が、頭の中での想像力を無限に膨らませることができる。歴史を繋ぐ上で建築が現存する必要はなく、それを利用した人の心に残ることができれば、その建築はこの場所に意味を成したものであると言えるだろう。そうやって、人の思い出や感情により、後世の想像に引き継がれていく。

そして、そこには文献では決して得ることのできない建築の本質の姿があるのだと思う。
古くから残る建築もあれば、新しい建築も違和感なく共生する。そこには、様々な人によるドラマがあり、それらが新旧問わず建築を繋ぐ動脈となっているのである。

そしてその強く繋がれた建築群が新たな人の想像を生み、繰り返し繰り返し歴史を足していけるのは、この町の適度な規模によるものなのだと考える。

広く大きすぎる町では意識まで繋ぐことはできない。三宮の繁華街と適度に離れ、線路と海に挟まれた多様性を持つ環境ながらも凝縮された場所であるから、より強く繋がっているのだろう。今も昔もこういった繋がりが建築を後世へ紡ぐ助力となっている。

そこにはお酒があり、人があり、歴史があり、それらがこのみなと元町を先へと繋いでいく原動力になっているのであろう。

高宮　透（たかみや とおる）
株式会社グランデザイン一級建築士事務所
代表取締役／一級建築士／兵庫県建築士会所属
スペイン・バルセロナにて建築を学び
日本＋西洋の新たな建築を創造する